

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 2 集

— 本納城跡・森山城跡発掘調査報告 —

昭 和 56 年 度

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県内には、数多く中近世遺跡が所在し、それにまつわるさまざまな史実、伝説も伝えられています。千葉県教育委員会では、昭和45・46年度に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内に586か所の所在を確認し、成果を「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行したところです。その中で、城跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模・構造・性格等の実態についての調査は殆んど行われておりません。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から、中近世城跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを選び、その規模・性格等を把握し、保存策を講ずる資料を得る目的で、測量・確認調査を実施しています。

今年度は、小見川町森山城跡・茂原市本納城跡の2件について調査を実施し、主要部について、規模・構造等を明らかにすることができましたが、何分にも城跡が広大であり、今後に俟たねばならない面もあります。

このたび、調査概報を刊行する運びとなりましたが、この報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護の上で多くの方に利用されることを期待しております。特に、関係市町村教育委員会におかれましては、今後の保護・活用の上で積極的に利用されることを希望します。

終りに、調査に当たって、多大なご協力をいただいた小見川町、茂原市教育委員会と地元関係者の方々、調査を担当された財團法人千葉県文化財センターの職員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和57年3月30日

千葉県教育庁文化課長

斎藤 浩

凡 例

1. 本書は、茂原市本納所在の本納城跡（コード番号210—003）及び小見川町岡飯田所在の森山城跡（コード番号344—001）の確認調査概要報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助（総額5,000,000円、補助率50%）を受けて、調査を跡千葉県文化財センターに委託し実施したものである。
3. 調査は、本納城跡が昭和57年1月19日～1月28日、森山城跡が昭和57年1月29日～2月5日まで実施した。なお、地形測量は日経コンサルタント株式会社に委託し実施した。
4. 調査及び整理作業にあたっては、本納城跡を天野努が、森山城跡を中山吉秀が担当した。
5. 調査に当って、本納城跡については、茂原市教育委員会の関係者各位、茂原市文化財審議会々長三枝幹男氏・同委員鉢木信堂氏、土地所有者の成就山蓮福寺住職大矢圓城氏及び地元の本納城を守る会の皆様の御協力があった。また、森山城跡については、小見川町教育委員会の関係者各位、慶増完氏（県文化財保護指導委員）及び、土地所有者石毛政光氏・飯田信夫氏・木内道氏の御協力があった。各々記して謝意を表する。

目 次

序 文

凡 例

I. 本納城跡発掘調査報告	1
1. 遺跡の位置と環境	1
(1) 遺跡の位置と地形	1
(2) 周辺の遺跡と歴史的環境	1
2. 本納城跡の概要	4
(1) 城跡の概観	4
(2) 城跡の周辺	8
3. 発掘調査の概要	9
(1) 調査方法と経過	9
(2) 調査区の概要	13
4. 結 語	15

挿 図 目 次

1-1図 本納城跡とその周辺の遺跡	2
1-2図 本納城跡位置図及び地形図	7
1-3図 本納城跡概念図	別図
1-4図 本納城跡地形測量図 (1:1,000)	別図
1-5図 本納城跡トレント配置図	10
1-6図 本納城跡A~Fトレント土壠断面図	12
1-7図 本納城跡A・B・Fトレント土壠断面図	12
1-8図 本納城跡001・002遺構実測図	12

図 版 目 次

図版 1-1 空からみた本納城跡	
〃 1-2 本納城跡本城山（第I曲輪）遠景	
〃 1-3 本納城跡本城山（第I曲輪）からの遠景	
〃 1-4 本納城跡第I曲輪南側及び南東側削り落し・腰曲輪	

// 1-5	本納城跡第Ⅰ曲輪及び北東尾根(1)・南西尾根(1)
// 1-6	本納城跡第Ⅰ曲輪北東尾根(2)
// 1-7	本納城跡第Ⅰ曲輪北東尾根(3)及び南西尾根(2)
// 1-8	本納城跡第Ⅰ曲輪西側部及び第Ⅱ曲輪
// 1-9	本納城跡第Ⅱ曲輪北・西尾根及び各腰曲輪
// 1-10	本納城跡第Ⅱ曲輪及び西側尾根等関係遺構
// 1-11	本納城跡発掘区全景
// 1-12	本納城跡発掘区及び土層断面
// 1-13	本納城跡発掘区及び001遺構
// 1-14	本納城跡発掘風景
II. 森山城跡発掘調査報告 35	
1.	城跡の地理的環境 35
2.	森山城跡と周辺の城跡 36
3.	森山城跡の概観と歴史的環境 36
4.	調査の概要 40
5.	出土遺物 42
6.	まとめ 44

挿図目次

2-1図	森山城跡と周辺の城跡 35
2-2図	森山城跡概念図 38
2-3図	発掘トレンチと土層断面図 41
2-4図	第1トレンチ検出の住居跡実測図 42
2-5図	出土遺物 43
付 図	森山城（本丸周辺）地形測量図（1:1,000）

図 版 目 次

- 図版 2-1. 空から見た森山城
- 2-2. 森山城跡の遠景（上），台地西端下に残る外濠（下）
- 2-3. 大手門近くの土橋（上），三の丸跡から見た大手門の土橋（下）
- 2-4. 三の丸跡（上），二の丸跡（下）
- 2-5. 二の丸跡から見た三の丸跡西の土橋（上），三の丸跡西の土橋（下）
- 2-6. 森山城関連の遺構
- 2-7. 根古屋から見た本丸跡西側の土橋（上），本丸跡から根古屋にかけての土橋（下）
- 2-8. 空堀の現況
- 2-9. 森山城関連の社，寺
- 2-10. 発掘トレンチと土層

本納城跡発掘調査報告書

I 本納城跡発掘調査報告

1. 遺跡の位置と環境（1—1図）

(1) 遺跡の位置と地形

本納城跡は、茂原市本納字本城にあり、国鉄外房線本納駅の西方 500 m にある成就山蓮福寺背後の丘陵上に所在している。

この地域一帯は、東京湾側の千葉市・市原市と太平洋側の大網白里町・茂原市との境をなす分水界から九十九里平野に向って延びる丘陵地帯の縁辺部にあたる地域である。特に、大網白里町から茂原市にかけて、現在の海岸線（九十九里海岸）に平行して約 10 km の地を弧状をして走行する丘陵一帯は、平坦面の広い下総台地と異って平坦面が狭く樹枝状に入り組んだ複雑な地形を形成している。

城跡は、この丘陵地帯の縁辺部にあたる地を占地しており、北側は南白亜川の支流の赤目川の形成する広い谷とその支谷に囲まれ、東側は九十九里平野に、さらに南側は東の九十九里から延びる小支谷に各々囲まれた、標高約 50～64 m を測る樹枝状の丘陵を地形としている。丘陵下の水田面との比高は約 40 m である。

城跡のうち、本城山と呼ばれる標高 64 m 程の最高部一帯は、地元の有志の方々による手入れがよく施されており、本城山公園とも呼ばれている。ここからは、九十九里平野及び太平洋を眼下におき、さらに北側は遠く東金・成東から銚子方面にかけて、また、南東側は太東岬の景観を望見することが出来る。

本納城は、この本城山を中心として、北西側・南東側・南側・南西側・北西側に各々樹枝状に延びる丘陵上に構築されており、その範囲は広大な面積にわたるが、城郭の主体部分は本城山を中心とする区域と想定される。このうち南西側の丘陵は、本城山から約 400 m 程のところで標高約 83 m と一段高くなり、そこからさらに北側と南西側に分れて延びており、北側へ延びる丘陵はあたかも本城山を包み込むようにして赤目川の形成する北側の谷に突き出している。また、南西側へ続く丘陵は、本城山の南側に樹枝状に入り込む谷の最奥部で、さらに東側に大きくなっている。北側の丘陵同様、本城山を包み込むようにして、九十九里平野に向っている。

(2) 周辺の遺跡と歴史的環境

本納城跡を含め、県下で中近世城跡と呼ばれる遺跡は、現在 132か所ほどが周知されているが、このうちの大部分が中世城跡といつても過言ではない。本納城跡周辺についてみると、その周辺約 10 km 程の範囲に城跡、砦跡、館跡と呼ばれる遺跡は、15か所を越えている。これら本地域における城跡等については、その一端を 1—1 図に図示したが、概要は次表のとおりである。



1-1図 本納城跡とその周辺の城跡

No.	遺跡名	時期	所在地	立地	形態	備考	
1	東金城跡	中世	千葉市東金大字谷	半島状台地	古墳群	土塁空堀一部、酒井氏1代の城跡、天正末に落成。	
2	小野城跡	中世	千葉市大字小野	台地	古墳群	空堀一部、南北朝時代木高氏城跡。鎌岡期は酒井氏の支城と考えられている。	
3	小西城跡	中世	山武郡大網白里町小西字城山	台地	多郭	土塁空堀一部。長崎郡御城跡といふ。	
4	裏宮山城跡	中世	山武郡大網白里町人郷字本宿	平野状台地北端	不規	水道期土気城と遷升治の2代大蔵介在城。	
5	土気城跡	中世	千葉市土気町土坂之内・御間、ヤッコ、本駒台・太鉢沢、井ノ沢	丘陵台地・連郭式	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見、御見。周辺に「坂ヶ谷」、「平田」、「中戸谷」、「開洋」などの字名あり。	
6	金剛寺跡	中世	千葉市小金木町字金剛(八幡神社裏山)	舌状台地端部	丘陵台地・单郭式	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見。周辺に「坂ヶ谷」、「平田」、「中戸谷」、「開洋」などの字名あり。
7	大入城跡	中世	千葉市人郷町字大入、東条・西条	舌状台地全域	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見。	
8	立山城跡	中世	千葉市人本町字立山、立山	舌状台地全域	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見。	
9	向香城跡	中世	千葉市板倉町字向(行法寺裏山)	舌状台地先端部	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見。	
10	板倉城跡	中世	千葉市板倉町字向ノ根・瀬之内門入寺下郷、松原(大庭又宮東側)	舌状台地先端部	山城	土塁、空堀、櫛曲輪、御見。周辺に「横瀬」、「瀬内」などの字名あり。	
11	高田城跡	中世	市原市高田字南沢	半島状台地	多郭	北名の新得高田の跡を蘇都を置くこの地に築城するといふ。	
12	平川郡跡	中世	千葉市平川町字向ノ瀬ノ原(又太神社境内及び周辺)	舌状台地全域	丘陵台地・单郭式	土塁、空堀、櫛曲輪。周辺に「横瀬」、「瀬内」などの字名あり。千葉県東部平川郡の別称といふ。	
13	高原寺跡跡	中世	市原市花園字元山	山腹～山麓	郭	水谷一帯より、鎌倉時代の高原農耕の居跡跡が発掘されたといった。	
14	橋本城跡	中世	長柄町橋本字本合	古地		土塁空堀一部あり。武田八郎信長が高麗軍艦について築城したものといわれる。	
15	長南城跡	中世	長柄町長南字城井	樹枝状谷面	河心	土塁空堀一部あり。武田八郎信長が高麗軍艦について築城したものといわれる。	

このうち、本納城跡の北西約5kmの地には、平忠常(975~1031)が築き、その後、大治元年(1126年)に千葉城が築城されるまで、千葉氏始祖代々の拠点となったといわれる大椎城が所在しており、その周囲には、隣接して大椎城より古い様相を示すといわれる立山城跡等が存在している。また、北方の土氣・大網白里・東金方面にかけて、本納城跡から5~10kmの範囲には、本納城主黒熊大壁を滅ぼしたといわれる、酒井氏一族が居城とした、土氣城跡・東金城跡等が集中している。一方、南の茂原方面には、本納城跡から約10kmの地に、長南城跡が所在している。この長南城跡は、武田八郎信長が真里谷城について築城したものといわれており、武田氏一族の拠点であったものである。

以上、周辺地域の主として中世城跡を概観したが、また、足下に目をやれば、本納城跡の所在する本納の町近辺は、古代から由緒ある地域でもある。

北納駅の北方約1.5km、本納の町筋の北端にあたるところに目をやればこんもりと生い繁った森があるが、そこには、延喜式記載の「長柄郡一座小橋神社」に比定されている橋神社がある。橋神社については、三代実録によると、元慶元年五月十七日丁巳に正五位下に、さらに同八年七月癸酉には、正五位上に叙されている。一方、社伝によれば、当社は日本武尊の創建になり、弟橘比売命を祭神としている。本納町誌や武内社調査報告によれば、中世以後の橋神社については、諸々の古記録から、天正十九年(1591)辛卯十一月、徳川家康が神田六石を寄進しており、また、寛政十二年(1800)には、社殿が再建され、明治六年五月には県社に列入せられたとのことである。

なお、現在、当社本殿背後の地には、祭神である橋媛の陵墓とされている古墳が所在してい

る。この古墳に関するとして、本納町史中に、寛政十二年(1800)、時の橋神社神主水島川民部が、寺社奉行所に出した願書の要旨が、掲載されている。

これによると、「社の再建のため、やむを得ず寛政十一年(1799)十一月二十日から四日間、社のうしろの御廟陵を切り開いたところ、土中より十一のカメツボがあらわれ、その内訳は大櫃1、小櫃4、小ツボ4、鉄器2であった。」という。このことから、式内調査報告の中で菱沼勇氏は、この古墳について、恐らく前方後円墳ではなかったろうかと想定されている。

ともあれ、これら古墳や延喜式内社比定の橋神社の存在は、この地の古墳時代以降の歴史的環境の一端を、うかがわせるものがある。

2. 本納城跡の概要（1—2～4図）

この城跡については、戦国時代黒熊大膳の居城であったといわれており、房總叢書第四巻所収の土氣古城再興伝来記等によれば、本納城は土氣の酒井氏との戦いにより落城している。落城に至る経緯等については、本納町史に詳しく、また、その年代については、永祿十二年(1569)とも、あるいは古く大永年間(1521～1527)ともいわれる。城の概要については、千葉県教育委員会刊行の千葉県中近世遺跡調査目録によると、半島状台地丘陵に占地し、直線連郭形式の城跡であり、土塁、空堀が一部残ると記載されている。

今回の調査のうち、測量調査は、城跡の面積が広大なため、その一部しか出来なかつたが、踏査した範囲内の所見を含め、城跡について概観したい。

(1) 城郭遺構の輪郭

標高約64mを測る本城山周辺の地形は、主に本城山を中心として、北東(尾根I)・南東(尾根II)・南(尾根III)・南西(尾根IV)・北西(尾根V)の各々の方向に延びる五つの尾根状の丘陵によって形作られているが、さらに、本城山の西側(尾根VI)及び南側(尾根VII)には、南西にのびる尾根IVから続く丘陵が各々、本城山を包み込むようにして所在している。

これらの丘陵上には、別図1—3・4図に示したように、様々な城郭遺構が認められるが、これらは、本城山の頂部平坦面を中心に、尾根I・III～Vで構成される主郭部と、南東側から東及び北にのびる尾根IIによる中郭部、さらに南西側の尾根から西側、南側にのびる尾根VI～VIIによる外郭部の三地区に、大きく分けることが出来る。

主郭部(第I曲輪、第II曲輪、尾根I・III～V)

第I曲輪とした本城山の頂部は、40m×35m程の狭少な平坦部であり、小規模なものであるが、位置的には尾根I～VIIのほぼ中心部にあたり、かつ他の曲輪に比べてその標高は最も高く、城内はもとより、北は土氣地区から北東は大網白里へ東金方面、東側は九十九里、南は茂原方面から太東岬に至るまで、一望のもとに見渡せる位置にある。しかも、この第I曲輪の北

側から西側にかけては、2～3mの段差をもつて腰曲輪が配され、また屋根I～Vを含めて周囲全体は垂直に近く削り落されているが、さらにその中腹には幅3～4mの帯状の腰曲輪が各々めぐらされている。

また、北西にのびる丘陵の基部には、第II曲輪とした35m×15m程の平坦部が所在するが、この曲輪との間には南西の谷側に「堀切り」が、北東側には「削り落し」がなされ、ここに土橋状を呈する巾2m、長さ4～5mのネックが作り出されている。このようにみてくると、おそらくこの第I曲輪が本納城跡の主郭部をなすものと思われる。

次に、屋根I・III～Vの北東・南・南西・北西に各々のびる尾根は、いずれもほぼ垂直な「削り落し」と「堀切り」が附所に認められ、第I曲輪に近い部分では「削り落し」の施されている両側面の中腹には帯状の腰曲輪がめぐらしている。北西の尾根（V）の基部には、第II曲輪が所在するが、この曲輪の周囲には、腰曲輪や物見状のテラスなどが配され、また、その北西には7～8mの段差をもつ曲輪が認められる。この曲輪は、現在緩斜面となっているが、北東及び西側には、削り落された急斜面を持ち、北西へと続く尾根側には浅い堀切りがみられる。また、この尾根はその北側で、三叉状に削り出され、直下に帯状の腰曲輪がめぐるが、そこで大きく深い「堀切り」が施されたあとは特別な遺構はないまま細長い尾根となって北西下の部落へと続いている。さらに南西側の尾根（IV）は、第I曲輪から約35mの地点で切断され、そこからは約7～8m直下の帯状腰曲輪と連続するようにして西側にのびている。この西側にのびる尾根は、切断部から約160m程西及び南西に進むと、そこにはやや大きな「堀切り」がみられ、この「堀切り」と前述の切断部との間には幅10～15m、長さ60m程の平坦部が作り出され別の曲輪が設けられているように見えられる。南側の尾根（III）は、他の尾根に比して短いが、その尾根上には「切断部」と「堀切り」が他と同様にみられ、また、その両側の谷へと続く斜面には、帯状の腰曲輪や物見状のテラス等が階段状に作り出されている。このうち、東側の蓮福寺に向う傾斜地は墓地となっているため腰曲輪等の所在に不明な点が多いが、遺存する部分にはその痕跡がうかがわれる。

以上、第I曲輪を中心にして尾根I・III～Vを概観したが、その構造には複雑な様相が認められ、第I曲輪を主郭とするこの地区の重要性が看取出来る。

中郭部（尾根II）

第I曲輪の南東部から始まるこの丘陵については、未踏査の部分や、また、近年削り取られている部分も多く、不明な点が多いが、次の三区画に分けられる。

まず、第I区画（1～3図A）は本城山の南西部から始まるこの丘陵の基部から、現在の茂原市立本納小学校の建設により削られている地区までである。

この地区については、本城山に接する基部周辺は墓地による地形の改変が著しいが、丘陵の

南側には、尾根の両側を削り落しによって土壘状に作り出し、さらにその土壘状をなす尾根には所々に「堀切り」と、さらに高低差を設けるための「切断部」が認められ、また、南側斜面に所在する天満宮の北側の標高約 53 m を測る高い個所では、本城山の北西の尾根Vにみられた三叉状を呈する形状が作り出されている。そして、この南側の斜面には、帯状の腰曲輪が幾重にも段差をもってみられ、所々に堀底道の様な個所もみうけられ、主郭部とやや異なった様相がうかがわれる。また、本納小学校により削られた個所は、地図上（別図1-3）では若干平坦面を残しているが、実際の踏査時点では平坦面は全くなく、北側に急傾斜をなしており、おそらくこの部分は、東側の「右衛門郭」へと続く細尾根に近いものであつただろうと想定される。なお、現在本城山と切り離されているこの区画の基部周辺については、地形測量図や現地形での観察からすると、蓮福寺に面する西側の斜面の墓地等のある区域には帯状の腰曲輪の残存と思われる個所も認められ、本来この丘陵も高低差はあれ、本城山と統一していたものと想定される。

次に、第2区画（1-3図B）とした「右衛門郭」の丘陵については、丘陵中央部までの踏査は出来なかったが、周辺及び先端部の踏査での所見では、本納の街を見下す東側の斜面は、残存する部分では高さ 15～20 m にわたって削り落されて、その直下には腰曲郭や堀底道が認められる（図版1-10）。また、この丘陵北側の北西部のやや半島状に突出した先端部の地区は、同じく垂直に近い削り落しがみられ、明らかな城郭遺構の存在を示していた。

第3区画（1-3図C）とした戸戸城の丘陵の中央部は、すでに土取りにより削平されており、その大半が失われていたが、残存する先端部には各種の曲輪状の平坦面や帯状の腰曲輪が随所にみられ、その区域の広さからみると、あるいは「右衛門郭」と合せこちらが曲輪等城郭の構造では、主体を占めていたのではないかとも思える。

しかし、「右衛門郭」の字名のつく城郭遺構は、あるいは本納城落城後土氣城から来たといわれる城代家老板倉右衛門に関わる遺構とも考えられ、これらは今後の調査に待たれるところである。

外郭部（西側及び南側丘陵状尾根VI～VII）

第1曲輪の所在する本城山から南西に延びる丘陵状尾根（IV）は、本城山から直線距離にして南西約 450 m の標高 77 m 余を測る地点（1-3図D）で、さらに北側及び南側に大きく分れ、本城山を包み込むようにして、本城山の西側及び南側の丘陵を形成している。

まず、この西側の丘陵状尾根VIは、北の護神房との間に開析する赤日川の形成する谷に向い、本城山を包み込むようにして延びているが、尾根の所々に城郭遺構の一部が認められ、また、馬の背状の細いやせ尾根部分の両側は意識的に削りとられているような痕跡を残している。遺構は、丘陵の最先端部に独立する形で物見状の遺構（1-3図G）が認められるほか、南北尾根との境をなす地点（1-3図D）から約 100 m 北の地点には、あるいは物見櫓の跡とも考え



1-2図 本納城跡位置図及び地形図

られる個所がある（1—3図E）。これは径10m×15m程の橢円形に近い形状の平坦部をもち、高さ2~3m程で、その周囲は垂直に近く削り取られている遺構である。そして、さらにその北側約100m程の地には、尾根を落差10m程で切断し、さらに堀切っている個所が確認出来る（1—3図F）。

また、西尾根と分岐し南西に続く丘陵は、本城山の南側に東から谷が入り込んでいるが、その谷の最奥部の瀧尻の地点で南に大きく屈曲し、さらに南に延びると藤谷池の南の標高79m余の地点で、こんどは北東に屈曲して、東側の九十九里の平野に向って突出している。そして、本城山の南西600mの地まで延びてきて、西側の尾根とは逆に、南側で本城山を包み込む形を呈している。

この南西から南に続く丘陵については、前述した1—3図D地点から瀧尻までの間が土取りのため現地形の大半を失なっているため、また県道五井・本納線の南側の丘陵上については、未踏査のため各々城郭遺構の存在は不明である。只、県道五井・本納線によるこの丘陵の切通しの南側に、尾根の堀切りと思われる個所（1—3図H）が見受けられることから、あるいはこの丘陵上のほかの地点にも、北側の丘陵同様の城郭遺構の存在が想定される。そしてこの西側及びそれに続く南側の丘陵の両者は、その城郭遺構の存在と地形的なあり方からみて、第1曲輪の所在する本城山の主郭部及びそれに続く東側の中郭部に対する外郭部を構成し、城の中心部を西側及び南側で守る防禦線と見なすことが出来る。

（2）城跡の周辺

本納城跡は、すでに述べたように約64mを測る本城山の中央部を主郭とし、東西約3.0km、南北約4.5kmの広い範囲にわたるものと考えられるが、本城山を中心として、周辺の小字名等から城跡についてみてみると、1—3図（別図）に示した如くとなる。

小字名のうち、城の字がつく字名や城に関連すると思われる字名には、「本城」・「本城下」・「大手下」・「右衛門郭」・「右衛門郭坂」・「本町」・「本宿下」・「中宿」・「内宿」・「馬場谷」等がある。また、本城山北西部及び北東部の谷津にみられる「龍ノ口」・「瀧ノ谷」や、本城山の南側の谷の西奥部にみられる「瀧尻」の字名は、本納城を「臥竜山」或は「瀧之城」と称したという伝えから想定するならば、やはり当城跡に関わる字名と見ることが出来る。このほか、本城山の南西下の谷津周辺の平坦地には「内川戸」、さらに谷をへだてて「外川戸」の字名がある。これらは、あるいは城下集落を示すといわれる開戸・垣戸・開渡等の地名に類する字名とも思われる。なお「馬場谷」、「瀧尻」の中間に「鞘戸」という字名がある。この「鞘戸」について、本納町史では土氣古城再興伝来記にある「既に城の後なるさやとの山より石弓を投げ入れ、或は鉄砲を放して改め入りける程に、云々……」から、さやと現在の字名の「鞘戸」を対応させて考えられている。一方、字名のほか、屋号等のなかにも関係する名が認められる。すなわち、「大手下」の西側、本城山の南側にのびる尾根状丘陵の東に、「藏屋敷」、西側に「騎出」。

「上屋敷」の屋号をもつ家がある。また、本城山の北側丘陵下には「馬場」と呼ばれる地区があり、さらに、南西側に続く丘陵の標高約70m余を測る高所は「石射台」とも呼ばれている。

このほか、本納城跡本城山の南麓に所在する成就山蓮福寺は、H蓮宗妙満寺派顕本法華宗に属し、上総十ヶ寺の一つであるが、寺伝によると天正八年（1580）の創建で、土氣城主酒井康治が落城せしめた時の城主黒熊大膳及び城兵の菩提をとむらうために建立したものといわれる。また、前述した「右衛門郭」は一説では本納城が落城したあとに土氣城からきた城代家老板倉右衛門の郭ともいわれ、北西側の谷には「右衛門郭堀」と呼ばれる堀も所在する。その北側直下の裾には「黒熊大膳御茶の井」と呼ばれている井戸が所在する。この他の「井戸」については、本城山への通路となっている蓮福寺境内の右側の丘陵直下にもみとめられるほか、本城山北側の字本城下の丘陵裾部には、湧水が数か所認められる。

その他、城の周辺に所在する神社等についてみると、本城山の北側の谷を隔てた西側丘陵上及び裾に「日枝神社」・「薬師堂」が、南西の丘陵裾には同じく「日枝神社」と「川戸神社」、さらに南東から東に大きく延びる丘陵の斜面部に「天満宮」が各々所在している。なお、本城山から「右衛門郭」にかけての丘陵南側直下の本納の街の道路筋をみると、本納小学校の正面付近で不自然な屈曲が認められる。付近の字名からすると、この周辺が城下集落を示す地とも考えられ、城下集落における道路の名残りを留めた形で現在の道路が形作られているとも考えられる。

以上、特に字名や屋号、地名、神社、仏閣等々、城に関係すると思われるものについて概観したが、これらの事柄に前述した城郭遺構の輪郭を重合せると、本城山を「主郭」として、南側周辺の平坦地を特に城下集落とした本納城の姿を想定することが可能かと思われる。

3. 発掘調査の概要

(1) 調査方法と調査経過

調査方法

発掘調査は第I曲輪とした本城山の頂部平坦地を中心として150m²を調査した。

まず、第I曲輪の約1,300m²の区域に、そのほぼ中央部を東西南北に縦横断する巾2mを基本とするA・Bトレンチを2本、計60m設定した。続いて、土層の観察等を考慮した補助トレンチを、Aトレンチの北側とBトレンチの西側に延長し、さらに、A・Bトレンチを中心としてC～Eの3本の補助トレンチを設けた。

また、このほかに、第II曲輪の東側に所在する堀切り部分と土橋状のくびれ部の区域に巾1m、長さ12mのFトレンチを設定した。調査はトレンチによる調査方法をとった。

調査経過

調査は、昭和57年1月19日から1月28日までの9日間に亘って実施した。

調査日誌抄

1月29日

午後から器材搬入。テントの設営。

調査区域等周辺の環境整備を行う。

1月20日

調査区域等の写真撮影を行う。

蓮福寺住職大矢圓城氏の好意により、檀家総代を含め地鎮祭を行う。

A・Bトレンチを設定し、各々、北側及び西側から1区、2区、……の順で発掘区を設け、発掘調査に着手する。AトレンチA-7グリッド表土下約10cm程の第2層中にて鉄釘小破片1点出土。

1月21日

C・D・Eトレンチを設定（発掘区分はA・Bトレンチと同様とする）。

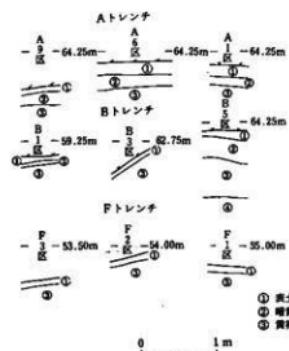
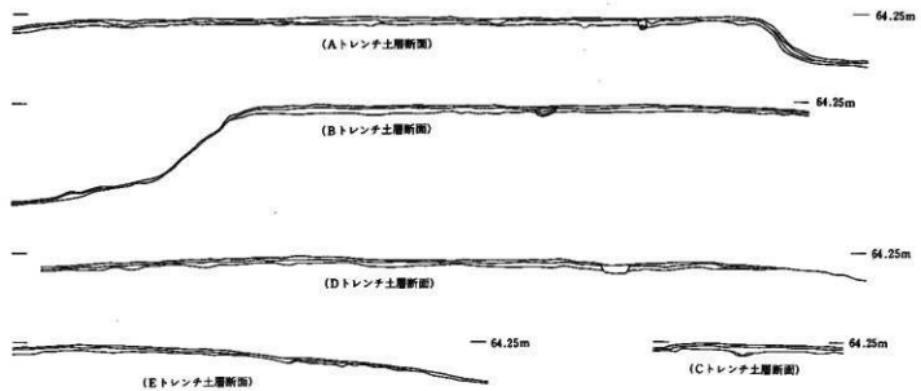
A・Bトレンチ発掘作業。C・Dトレンチ表土除去作業。

1月22日

A～Dトレンチ発掘作業。BトレンチB-5区にてトレンチ北壁にかかる、径1m程の
+

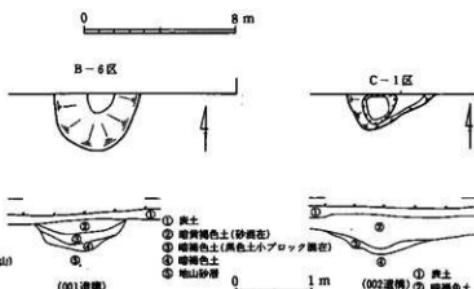


1-5図 本納城跡トレンチ配置図



1-7図 本納城跡A・B・Fトレンチ土層柱状図

1-6図 本納城跡A～Fトレンチ土層断面



1-8図 本納城跡001・002造積表面図

不整長円形のピット状遺構（001遺構）を検出。

Eトレンチ表土除去。

1月23日

A～Eトレンチ発掘作業。

1月25日

A～Eトレンチ発掘作業。CトレンチC-1区にて不整形のピット状遺構検出。

写真撮影のためにA～Eトレンチ清掃作業を行う。

1月26日

Fトレンチを設定し、発掘作業を行う。

A～Eトレンチ、写真撮影及び土層断面、遺構等、実測作業。

一部埋戻しを行う。

1月27日

Fトレンチ写真撮影及び実測作業。

A～Fトレンチ、埋戻し作業を終了する。

1月28日

午前中、器材等撤去を行い、発掘作業を終了する。

あわせて、遺跡の写真撮影を行う。

なお、トレンチ発掘は地山である第3層の砂層の上部まで発掘し、その面からさらにトレンチの壁直下を深さ30cm程土層観察用に掘下げる方法をとった。城跡の地形測量は、㈱日経コンサルタントに委託したが、現地作業の細部については立合いを行い、図化に努めた。また、発掘調査中と、さらに、調査終了後とにわたって調査区域外の城跡部分について、可能な範囲で踏査を試みた。

(2) 調査区の概要 (1-5～8図)

① 第I曲輪の調査

土 層 (1-6図)

A～Eトレンチにおける土層は、ほぼ均一的な状態を示している。第1層は、表土層であり薄いところで5cm程、厚いところで15cm程を測るが、基本的には第2・3層と同じく山砂層である。樹木の根等を含め、擾乱が著しい。第2層は、暗褐色を呈する砂層であるが、次の第3層とした固くしまった山砂層とは異り、軟かく、全般的に一様ではないよごれた感じのする砂層である。かつて、この本城山一帯には、松の大樹が多く繁っていたとのことであり、それらを含め樹木の根や、他の擾乱が箇所に認められた。また、この層は、若干検出された土器片等遺物の包含層でもある。この第2層は、特に第I曲輪の中央部平坦面を中心として、厚さ20～30cm程で確認されるが、南側及び東側の周辺部の斜面にいたる区域ではほとんどみられ

す、また、北側及び西側の一段低い腰郭状の平坦部や、次に記す堀切り部のトレンチにおいては、全く認められなかった。出土遺物の様相を含めて考えるならば、第Ⅰ曲輪地区の構築の際、あるいは魔城後における地山の削平等地形の改変によって出来たものと考えられる。

次に、第3層は主としてやや白っぽい黄褐色を呈する、堅くしまった砂層である。ほとんど他の要素を含まない純粋な砂層であり、地山そのものといえるものである。第3層以下は、BトレンチB-4区において、特に土層観察の為に深掘りをした区域の土層観察では、第3層よりやや褐色味が多く存在する地山の砂層である。さらに、第Ⅰ曲輪北側及び西側の一段低い腰郭状平坦部にかけての、AトレンチA-1・2区、BトレンチB-1～3区においては、薄い表土層の下は、その堅さに強弱はある、すべて純粋な砂層であった。

以上のことから、第Ⅰ曲輪については、本来の自然地形のうち、その頂上部を削平し平坦面を作り出すとともに、北側及び西側を削り落して明確な段差をもうけ、そこに一段低い腰郭状の平坦部を設定し、第Ⅰ曲輪を構築したものと考えられる。

遺構と遺物（1-5・8図）

発掘調査の結果、A～Eテレンチにおいては、性格不明なピット状の遺構が2基検出されたが、明らかに第Ⅰ曲輪に伴なうと考えられる遺構は検出されなかった。遺物は、陶器の小破片が、002遺構から1点と、BトレンチB-8区中から1点の計2点、またAトレンチA-7区2層上面から、釘かと思われる鉄片2点が、各々出土したのみである。これらは、いずれも1cm～2cm程の破片であり、図示し得なかった。以下、概要を記す。

001遺構

BトレンチB-6区において、検出された。北側にかかっているため、その約2分の1程を検出したのみである。東西の径が約110～120cm、深さ45cm程度を測り、平面形が不整長円形を呈すと思われるピット遺構である。土層断面をみると、第2層上面から掘込まれているが、埋土の状態は、時間の経緯を思わせるものがあった。遺物の出土はない。

002遺構

CトレンチC-1区において検出された。001遺構同様、トレンチ北側の壁にかかっており、その一部を検出したのみであるため、プラン規模等は不明な点が多い。第2層中から掘込みが認められるが、掘込み面は不明確である。矩形を呈す部分で、第3層の地山を約30cm掘込んでいる。

遺物は、本遺構の掘込み中と思われる第2層中から、内外面に鉄軸のかかった陶器の小破片が1点出土した。

② 堀切り部の調査

第II曲輪の東側の堀切り部から土橋状のくびれ部にかけて設けたFトレンチにおける土層の

状態は、巾4~5mの土橋状のくびれ部のほぼ平坦な面を除いては、厚さ10cm程の表土層(有機物質の混在した山砂層)の下は、黄褐色を呈するやや硬質の地山の山砂層であった。また、土橋状のくびれの部分には、表土層に相対する層として、巾2m程で地山の山砂層とほぼ同じ硬質の山砂が、20~30cmの厚さで存在しており、その直下には厚さ8cm、巾1.2m程の暗褐色を呈する山砂層が認められたが、意識的に土橋状のくびれの部分に盛土なされたものかどうかは、明確にし得なかった。

なお、遺物は堀切りの底面に近いFトレンチ2~3区の表土下から、近世陶器と考えられる鉄軸を施した陶器の径1~2cm程の小破片が、2点検出されたのみである。なお、遺物は小破片のため図示し得なかった。

以上が発掘調査の結果である。特に、その調査面積に比して出土遺物は数点であり、かつ、すべて小破片のためその時期を確定出来なかった。また、遺構も城跡に伴なうものと明確に判断出来るものではない。これは、調査区域を限定したということも一因と思われるが、より以上にこの山上の曲輪は、日常的な生活の場ではなかったことによるものと考えられる。

4. 結 語

本納城跡は戦国時代、黒熊大膳の居城であったが、土氣城を居城とした酒井氏により永禄十二年(1569)、あるいは古く大永年間(1521~1527)に落城させられたといわれる古城跡である。そして、落城後は土氣城酒井氏の支配下の支城として機能した如くであるが、酒井氏も天正十年(1590)小田原北条氏の滅亡とともに運命を共にしており、それにより本納城も廃城となつたものと思われる。

なお、黒熊大膳については「土氣古城再興伝来記」等にみえるが、その名前以上のことは明らかではなく、また、本城跡も位置的には北の土氣城跡と南の長南城跡のほぼ中間に位置するが、その近辺には支城・砦の類は現在のところ確認されておらず、その性格・築城時期等々今後の課題とするところが多い。

今回の調査では、本納城跡は第Ⅰ曲輪とした本城山を主郭部として、西側及び南側で主郭部を包み込み外郭部を構成する丘陵によって囲まれた東西約3.0km、南北約4.5kmにわたる範囲が想定された。また、城郭遺構をみると、自然丘陵の「やせ尾根」を利用しているためか、主郭とした第Ⅰ曲輪をはじめとして、いずれも小規模な形状である。しかし、その遺構は複雑な様相を示しており、形態的には戦国山城式の形式で、多郭式の階段状丘陵城郭ともいべき部類の城跡と考えられる。そして、これらは総体として把えた場合、多角的・多面的な機能と目的をもつようと思われる。また、細尾根に設けられた曲輪や尾根の切断、堀切りの設定等々

城郭遺構の形態は、久留里城におけるそれに類似している。これらの細尾根に各々城郭遺構を設けた特徴的な形態は、木更津市から夷隅郡にかけての県南地域に所在する諸城跡に多々認められるということであるが、城郭構造の類似性が、自然地形に規制された築城技術に寄因するものか、あるいは築城し居城した居城主相互の関連性によるものかは、さらに、検討を要するところである。

この調査は、本納城跡の城郭遺構をより正確に把握する目的で実施されたわけであるが、委託契約等諸般の事情で調査着手が遅れ、事前の検討等計画準備に不十分な点もあり、十分な調査成果が得られたとは云い難い。特に、調査に入って痛感したことは、城跡が広範囲なため一定の枠を持った調査では地形測量の範囲が一部区域しか実施できず、このため城跡の全容を把握することが困難なことであった。また、城跡の発掘調査についても、その調査面積等に限定のある場合は、より以上に、地形測量図等による全容の把握こそ急務であり、その把握の後に調査個所を決定すべきことなど、調査方法について再考させられたところが多い。さらに、文献を含め周辺地域の調査等短期間で実施することは困難であり、今後はその調査時期・調査体制・方法等に十分意をつくす必要を痛感した次第である。

なお、本納城跡本城山は、成就山蓮福寺の所有地であるが、地元の「本納城跡を守る会」の方々の手弁当による活動により、よく手入れがなされている。今後とも、本納城跡が郷土の文化財として保存活用されてゆくことを願うとともに、調査に御協力いただいた、次の方々には記して心から感謝する次第です。

鳥井良夫・大橋正光・岩村増次郎・大野正男・加藤清司・小村近・緑川正記・鈴木忠藏・高橋松恵・大藤鉄治・石井正雄・山口儀晃・朝倉秀子・金坂てい・吉井敏子・寺島享子

引用・参考文献

- 「千葉県中近世目録」1970・1971 千葉県教育委員会 昭和45・46年
- 「本納町誌」本納町社会教育委員会 昭和30年
- 「土気古城再興伝来記」「房総叢書」第四巻（史伝其二）房総叢書刊行会 昭和16年
- 「千葉市史」原始古代中世編、同史料編Ⅰ、千葉市・千葉市史編纂委員会 昭和49年
- 菱沼勇「橘神社」式内社調査報告第十一卷（東海道6）式内社研究会・皇學館大学出版部 昭和51年
- 小室栄一「中世城郭の研究」株人物往来社 昭和49年
- 鳥羽正雄編著「日本城郭史の再検討」日本城郭史研究叢書1 名著出版 昭和55年
- 伊礼正雄他「上総久留里城」君津市教育委員会・久留里城跡発掘調査団 昭和54年
- 後藤和民「松部城址調査報告」「松部」千葉県文化財保護協会・松部調査団 昭和52年
- 伊礼正雄・柏山林継他「木更津市真里谷城址—遺構確認調査概要—」木更津市教育委員会 昭和54年
- 府馬 清「房総の石城址めぐり」上巻 上総国ノ有峰書店 昭和52年

写 真 図 版

空からみた本納城跡



(本城山－南東側より－)



(本城山～北東尾根－東側より－)



(第II曲輪～本城山～南西尾根－西側より)

本納城跡本城山（第I曲輪）遠景



(南東側九十九里方面を望む)



(東側九十九里方面を望む)

本納城跡本城山（第 I 曲輪）からの遠景

図版 1-4



(第1曲輪)



(第1曲輪南側削り落し)



I曲輪)



(第1曲輪南東側腰曲輪)



(同左・切だ及び削り落し)

本納城跡第1曲輪南側及び南東側削り落し・腰曲輪

図版 1-5



本納城跡第I曲輪及び北東尾根(1)、南西尾根(1)



(北東尾根南側削り落し)
及び帯状腰曲輪



(削り落し)



(帯状腰曲輪)



(北東尾根東支尾根掘切り、
切断部削り落し)

本納城跡第1曲輪北東尾根(2)



(第Ⅰ曲輪北東尾根北支尾根切断部)



(同左)



(同上北側尾根)



(第Ⅰ曲輪南西尾根)



(削西尾根切断部)

本納城跡第Ⅰ曲輪北東尾根(3)及び南西尾根(2)

(第Ⅰ曲輪～第Ⅱ曲輪間—西側から)



(第Ⅰ曲輪西側帶状腰部)



(同左及び巻堀)



(第Ⅱ曲輪—第Ⅰ曲輪より—)



(第Ⅰ曲輪～第Ⅱ曲輪間堀切り)

本納城跡第Ⅰ曲輪西側部及び第Ⅱ曲輪



(第II曲輪北東側腰曲輪)



(第II曲輪北尾根－南側より一)



(第II曲輪南側腰曲輪)



(第II曲輪西尾根－東側より一)

本納城跡第II曲輪北・西尾根及び各腰曲輪



(第II曲輪西尾根西侧腰曲輪)



(同左北西尾根堀切り・切断部)



(第I曲輪南西尾根堀切り)



(西側尾根堀切り)



(右衛門郭北側断面)



(黒熊大膳御茶の井路)

本納城跡第II曲輪及び西侧尾根等関係遺構



(第1曲輪－北側から－)



(第1曲輪－南側から－)

本納城跡発掘区全景



(A トレンチー北側よりー)



(同左ー南側よりー)



(B トレンチー西側よりー)



(同左ー東側よりー)



(A トレンチ I ~ 2 G)

本納城跡発掘区及び土層断面



(B トレンチ 3 ~ 4 G)



(E トレンチ東側からー)



(F トレンチ南側からー)



(F トレンチ北側からー)



(B トレンチ 5 G 土層断面)



(001遺構)



(同左土層断面)

本納城跡発掘区及び001遺構



(発掘作業)



(埋戻し作業)

本納城跡発掘風景

森山城跡発掘調査報告書

II 森山城跡発掘調査報告

1. 森山城跡の地理的環境

森山城は、千葉県香取郡小見川町下飯田字根小屋2875番地外に所在する中世の城跡である。この地は、小見川町の最東端に位置し、香取郡東庄町に隣接した場所である。

本城跡は、東庄町方面から西に延びる舌状台地上の西端に位置し、その最も高い標高は、約50.8mをはかるが、台地上はほとんど平坦で、現在は畠地、山林、荒蕪地等となっている。台地上には、城跡に關係ある小字名がいくつか残り、根古屋、仲城、三城、城戸下、長南堀が知られている。

また、台地下は現利根川右岸の小見川町下飯田方面から南に侵入する支谷が、本台地(城跡)



凡 例 1 森山城 2 須賀山城(東庄町) 3 布野村 4 平良文館 5 和田村(東庄町) 6 小見川陣屋
7 小見川城 8 木内村 9 下小川村 10 川上村 11 小見村 12 蛇峰城 13 造内城 14 府馬城

2-1図 森山城跡とその周辺の城跡

を北と南から開むように入つており、舌状台地を形成する本城は、いかにも中世城跡としての立地条件をもつ城のひとつといえる。

2. 森山城跡と周辺の城跡（2—1図）

森山城の所在する小見川町をはじめ、香取郡、海上郡などの利根川右岸上には、北総台地を地盤とした中世武士団の城跡、砦、館址が数多く存在している。

その中でも、森山城は規模、構造上からも本地域における数少ない中世平山城の形式をもつ城跡である。その周辺では、隣接した東庄根方には須賀山城（2）が存在する。この城は、森山城初代の東胤頼がかつて居城としていた、半島状の台地上の多郭雑形式の城で、空堀、土塁の一部が残っている。また、小見川町阿玉台には、平安時代の平良文館（4）がかつて存在し、更に同町布野には布野砦（3）が丘陵上に存在する。この他、東庄村では、千葉氏とも関係の深い大友城があり半島状台地に直線連郭式の構造をもつものである。

このように付近の城跡を概観すると、小見川町では12の城跡、砦があり、東庄村でも大小9か所の城跡、砦、館址等が存在している。

しかし、これらの城跡等は、その存在は知られていても、測量調査、発掘調査の実施されているものは少ない。特に、香取郡地域は山砂採取事業が盛であり、近年その開発によって消失した城跡も少なくない。出来る限り、城跡等の規模、構造について調査を実施し、今後の保存、活用するための資料作成することが急務といえよう。

3. 森山城跡の概観と歴史的環境

(1) 森山城の概観

森山城は、別名飯田城、横城、柑子城などと呼ばれる中世の直線連郭式の平山城である。

「東鑑」によると、建保6年（1218年）に千葉常胤の6男である東六郎大夫胤頼が、須賀山城（東庄村根方）から移住してこの森山城を築城したとされている。また、^{さち}東氏が森山城を居城としたのは、胤頼、重胤、胤行の3代で、胤行が承久3年（1221年）に美濃山田庄（現岐阜県郡上郡大和村）の新補地頭として赴任してからは、胤行の長子である東泰行以後を下總東氏、4男行氏以後を美濃東氏と呼ぶようになった。この東氏の中には、東常縁と呼ばれる歌人として著明な人物もいる。

鎌倉、室町時代を通じて、森山城をはじめこの一帯は、千葉氏の勢力下にあり、戦国時代のいくつかの合戦も行われてたことが、「常総軍記」等によって知られる。

この森山城の最後の城主は、14代東直胤で、天正18年に小田原北条氏に味方し、「小田原城を守ったが、豊臣秀吉軍に攻撃され、小田原城と共に天正18年（1590年）に、この森山城も落城した」と記されている。

また、森山城の東方には、真性院芳泰寺（曹洞宗）があり、初代の東胤頼が東庄町平山から当地に建仁2年（1202年）に移転させた寺で、安貞2年（1228年）に他界した胤頼は、この寺に埋葬されている。現在、この芳泰寺には胤頼夫婦を供養した五輪塔（江戸初期のもの？）が2基建立されている。

森山城は、既に述べたように半島状に突出する台地上のほぼ全域に構築された直線連郭式の平山城である。その範囲は、台地の西端部から三城（三の丸跡）と呼ばれる東西にのびる約600mに及ぶ広大な地域と推定される。また、台地の縁辺部には、自然地形を巧に利用し、急斜面でオーバーハング状の急峻な崖を人工的につくり出し、容易に侵入できない工夫が各所にみられる。この他、台地の端部に土壘の一部が残存する他、台地の各所で空堀や土橋を構築して、外敵が一気に侵入されない工夫も見られ、中世城跡の様子をよく残している。以下、小字名として残る城戸下、三城、仲城、仲々城、奥仲城、根古屋等の小字名と城の各部所とをあわせた現況を述べてみたい。

鳳凰郭（2-2図）

大手門跡の右側にのびる一帯の台地で、ほとんど平坦であり、台地縁辺部は急峻な崖となっている。その一角に、鳳凰社と呼ばれる祠があり、地元では「おう様」と呼んで信仰しているという。また、明治17年の略測図によれば、6基の塹が存在していたが、現在では確認できない。

三城

城の三の丸に相当する。東側は、大手門跡と鳳凰郭を分断する空堀、西は二の丸と区分する東西約130m、南北約140mの区域で、台地上はほぼ平坦で、南北の台地縁辺は人工的に急峻な崖となっている。なお、東側の空堀の内側には高さ2m程の土壘が、南北の台地縁辺にも高さ約50cm～1m（現在高）の土塁がめぐる。

仲城

おそらく、二の丸に相当する場所で、東を三の丸、西を本丸にそれぞれ空堀によって区画される。南北の最長で約120cm、東西では約130mをはかる。現況は、畠地が主で、その一部には豚舎が構築されている他、本丸の境の堀は、ほとんど埋められている。

仲々城（本丸跡）

城の本丸に相当する場所で、本城跡の中で最も広大な面積をもつ。本丸の東側は、二の丸同様に南北から掘られた空堀が存在するが、現在はほとんど埋められており、南の空堀付近には牛小屋が構築され、最も擾乱を受けている個所でもある。また、西側の堀は幅約80m、深さ4mもあってよく旧状をとどめている。南側の空堀の一部は、埋められて、杉が植林されている。南北の台地縁辺には土壘がまわる他、斜面部は急峻な崖になっており、特に北側では、その状態が顕著で、場所によっては崖がオーバーハングしている所も見られる。



長南堀

「香取郡誌」によれば、長南堀と呼ばれる堀があり、これは現長生郡長南の人夫によって構築された堀であるという。現在の小字名では、その所在については不明。

根古屋

小字名では、根小屋である。本城の最も西端にあたる場所で根古屋といふのは、本来、城に駐屯する兵隊の住む集落のことをいい、台地西端の水田部分（外堀に当たる）にも根古屋の地名が残っている。また、この地は奥仲城と呼ばれる場所であり、南北に長い面積をもっている。その大きさは、東西約130m、南北約200mをはかり、一部北側で低くなっている。根古屋の最西端下には、妙見宮が存在する。

(2) 遺存する遺構（第2図）

森山城に現在でも現存する遺構としては、空堀、土橋、土塁、外濠等があげられる。

空 堀

空堀は、大手門跡から根古屋まで4か所に存在する。その一部は埋められて植林されているが、おおむね現況をとどめている。堀の幅は、約10～80mと一定しておらず、深さも2～6mを測る。現在埋まっている空堀は、本丸跡西側の一部と二の丸跡西側の堀は旧状をとどめずほとんど埋まっている。

土 橋

土橋は、大手門跡の一の土橋から根古屋東側の土橋まで5か所あり、現在は農道として使用されている。これらは、ほとんど破壊されることなく現況を保っている。幅は狭く、2m前後を測り、大勢の人数が一度に通過することは不可能である。

土 塁

城の構築時、土塁は、台地の縁辺を一定の高さでめぐっていたと思われる。しかし、廃城後は、自然や人工的破壊によって、現在残っているか所は僅かである。比較的よく残っているのは根古屋東側の土塁で、長さ約60m、高さ2m強を測る。現存する土塁の高さは、50cm前後を測るものばかりである。

外濠

外濠は、台地西端下の小字根古屋付近によく残っている。幅は、20m前後と平均しているが、幅の広い所では50mに及んでいる。当時の外濠の様子をよく残す場所は認められず、また、私有地となった外濠を埋めて家屋を新築している所もある。

4. 調査の概要

森山城の調査は、昭和57年1月29日から2月5日まで、城跡の測量調査を主体とし、本丸跡の一部で第1トレンチ ($2\text{ m} \times 35\text{ m}$)、第2トレンチ ($2\text{ m} \times 40\text{ m}$) の 150 m^2 の発掘を実施した。調査の概要是、後に述べるところであるが、調査では城跡に関係する遺構の検出はなかった。

しかし、本台地を城構築以前に使用していた、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代と思われる石棺状小堅穴1基、溝1条（時期不明）を検出した。以下、発掘を実施した2つのトレンチの概要と土層について述べる。

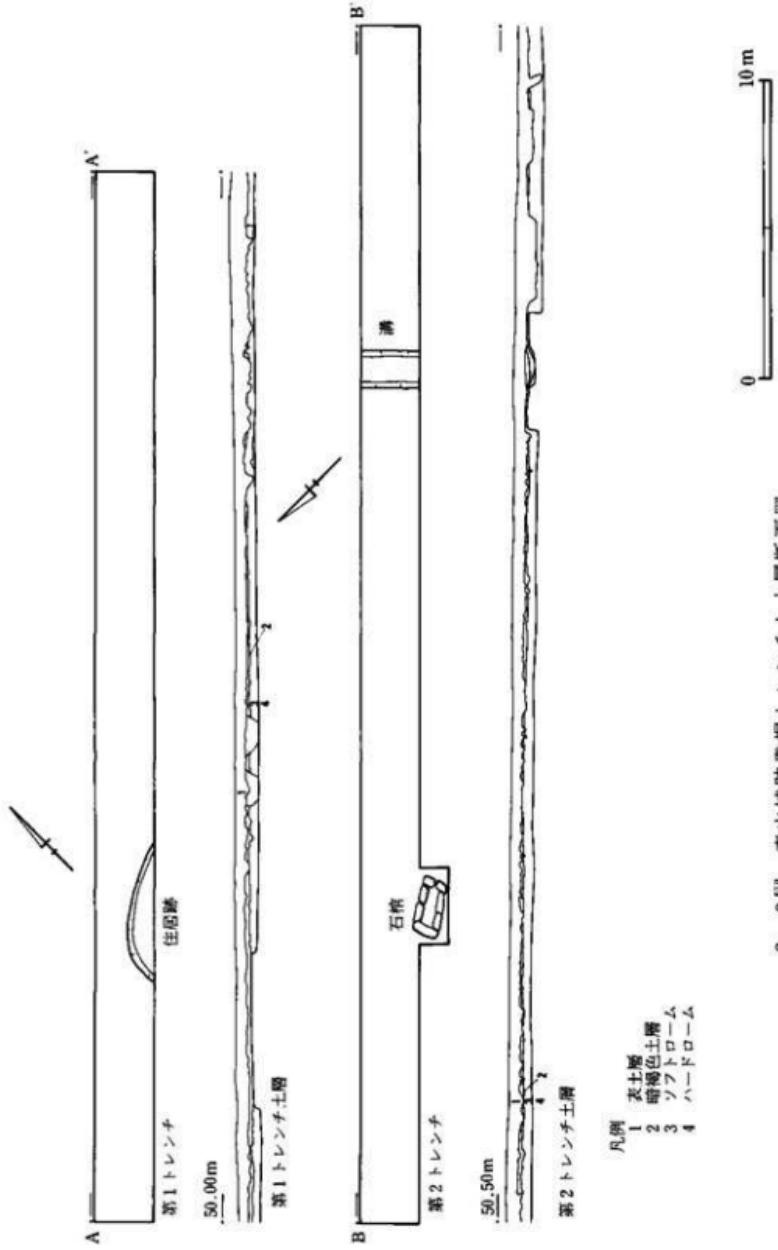
第1トレンチ（2-3・4図）

第1トレンチは、本丸跡にほぼ南北に $2\text{ m} \times 35\text{ m}$ の範囲で設定した。本トレンチでの土層は、第1層は耕作土（黒褐色土層）で、 $30\sim50\text{ cm}$ の深さである。第2層は暗褐色土層で $5\sim20\text{ cm}$ と一定でなく、耕作がかなり深くまで入っている。場所によっては2層のないか所もある。第3層は、ソフトローム層で $30\sim40\text{ cm}$ 前後と平均している。第4層はハードローム層である。本トレンチでは、城跡に伴う遺構の検出はなく、弥生時代後期の堅穴住居の一部を検出した。調査したのは、トレンチ内にかかった部分で、住居跡の西壁及び床面の一部である。住居跡のプランは、円形ないしは不整円形と思われるが、一部であるため定かでない。検出面は、ソフトローム上面で壁高はトレンチ壁面で 35 cm 、トレンチ内では擾乱をうけ 10 cm 前後である。遺構内には3～4層、レンズ状の堆積土が認められる。床面は、踏み固められたのか、かなり堅い状態である。柱穴と思われるピットがあり、深さ 13 cm をはかる。床面近くより、2-5図4に示した北関東系の異条縄文の弥生式土器が出土したのみである。遺物の出土量は少ないものの、当該期の住居跡と考えられる。

第2トレンチ

第2トレンチは、本丸の中心部に $2\text{ m} \times 40\text{ m}$ でほぼ東西に設定した。トレンチ内の土層は、第1層は耕作土（黒褐色土層）で、深さ $30\sim60\text{ cm}$ をはかる。第2層は暗褐色土層で $4\sim20\text{ cm}$ 前後である。第3層は、第1トレンチの所見同様に、耕作によってかなり失われている。第4層はソフトロームで、平均 $30\sim40\text{ cm}$ 前後である。第4層のハードロームは、上面まで検出した。

本トレンチでも、城跡に伴う遺構の検出はなかったが、ソフトローム面で古墳時代の小形の石棺状遺構を確認した。（2-3図）形状は、凝灰質砂岩の切出し岩を組み合せたもので、長径 1.9 m 、短径 0.8 m の長方形である。しかし、本遺構については、確認のみで内部の調査は実施

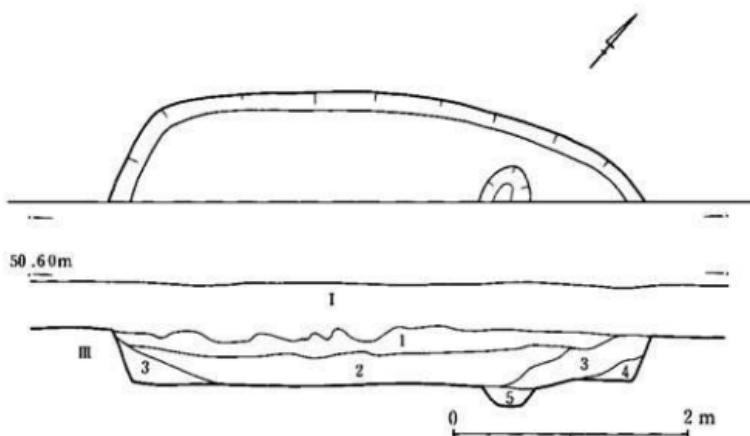


2-3図 森山城跡発掘トレンチと土層断面図

しなかった。この他、トレンチ東側で、南北にのびる溝1条を検出した。幅1.4m、深さ30cm前後で、第2層を切って黒色土を主体とする土層が3層埋まっている。時代は明らかでない。

土層図凡例

- I 表土層
- III ソフトローム
- 1 黒色土(耕作土)
- 2 黒色土(燒土粒+ローム粒含む)
- 3 暗褐色土(ローム粒+燒土粒含む)
- 4 晴褐色土
- 5 黑褐色土



2-4図 森山城跡第1トレンチ内検出の竪穴住居跡

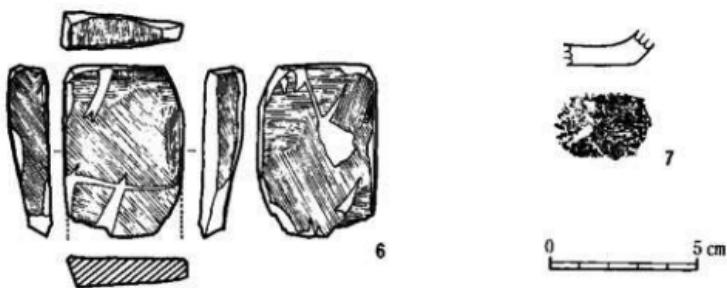
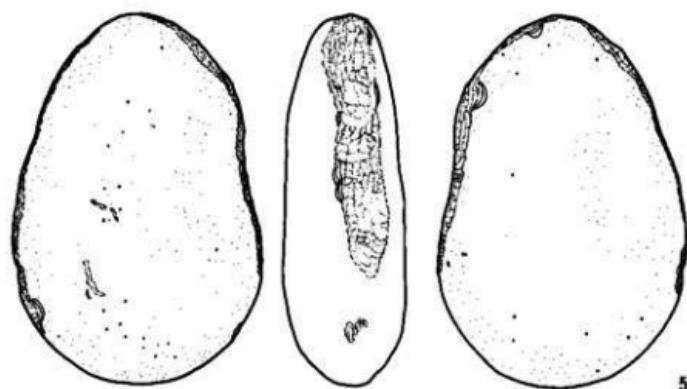
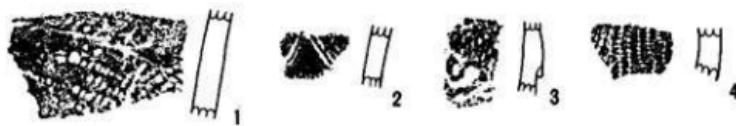
5. 出土遺物

今回調査した2本のトレンチからは、縄文土器片、弥生式土器片、土師器片、近世陶磁器片等約100片程度と若干の石器が出土した。この中で、近世磁器類について、森山城に関連する遺物も含まれていると考え、専門家に調べてもらったが、中世まで遡るやきものはなかった。しかし、これらの中には伊万里の染付、瀬戸焼、織部焼、常滑焼等がみられ、ほとんど近世の中～後半にかけての所産であった。以下、出土遺物について説明したい。

(1) 土 器

縄文式土器 (2-5図1・2)

縄文式土器は10数点出土している。図示したものは、縄文が羽状に施文されたもの(1)、櫛状工具の施文されたもの(2)がある。縄文中期～後期の土器であろう。



2-5図 森山城跡トレンチ出土の遺物

弥生式土器（3、4）

第1トレンチ内検出の竪穴住居跡内から出土したもので、（3）は壺形土器の口縁部近くで、異条繩文が施されている。（4）は、その胴部破片である。これらは、北関東系の弥生式土器と思われる。

土師器（7）

糸切り痕をもつ土師器の底部で、焼成、胎土からみて中世の所産であろう。

（2）石 器

扁平な河原石の周辺を加工した叩石（5）で、上端の周辺には明瞭な使用痕が認められる。石質は、玄武岩である。（6）は、粗粒砂岩製の磁石で、表裏面ともよく使用され、研磨時にみられる砂粒の移動方向もよく観察できる。石器は、いずれも第1トレンチ内からの出土である。

6. ま と め

以上が、森山城跡についての概要と調査結果である。発掘調査では、城に伴う遺構の検出はなかったものの、現況の空堀、土橋、土塁等の遺構は比較的良く残っているといえよう。今回の調査は、測量調査を中心としたものであるが、城跡の広大な面積からその全域について、収録することは不可能であった。しかし、本丸跡を中心とした地形図からも、城の遺存状態を知ることは可能である。今後は、台地西端部と三の丸跡周辺域を補足することによって、森山城の全域を把握することができるので、千葉県教育委員会、地元教育委員会の努力を期待したい。

参考文献

- 清宮秀堅 『下総国旧事考』一巻八一嵩書房（復刻）昭和46年
大木 衛 『日本城郭大系6』「香取郡・成田市」一森山城の項一講談社 昭和55年
府馬 清 『房総の古城めぐり』一下巻下総国一有峰書店 昭和52年
『影印 千葉県香取郡誌』嵩書房（復刻）昭和47年

写 真 図 版

図版 2-1



空から見た森山城



森山城遠景（西から）



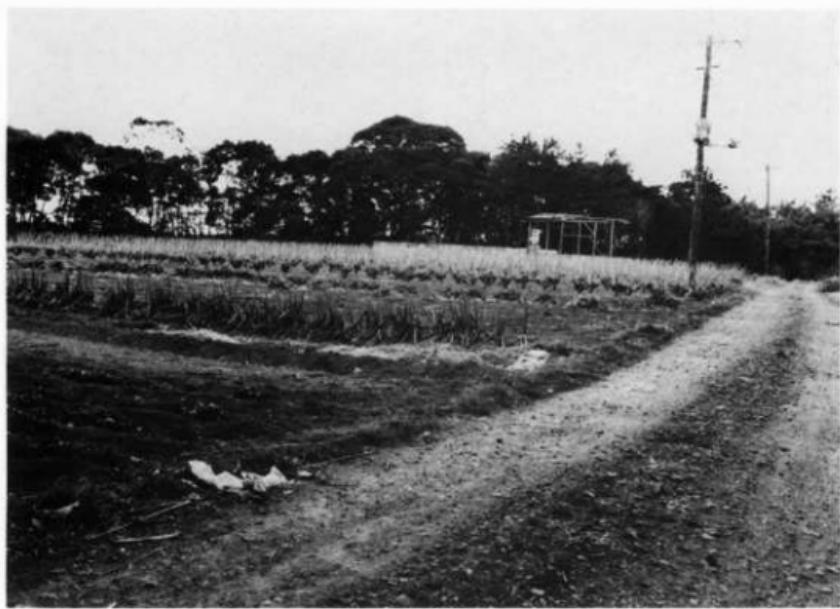
台地西端下に残る外濠（一部）



大手門近くの土橋



三の丸から見た大手門の土橋



三の丸跡



二の丸跡



二の丸跡から見た三の丸跡西の土橋



三の丸跡西の土橋



外濠（一部）



外濠（一部）



根古屋と呼ばれる台地



本丸跡（西から）



本丸跡（東から）



本丸跡と二の丸跡の空堀（現在埋まっている）



根古屋から見た本丸跡西側の土橋



本丸跡西から根古屋にかけての土橋（クランク状になっている）



本丸跡西側の空堀



二の丸跡東側の空堀



大手門脇の空堀



妙見宮



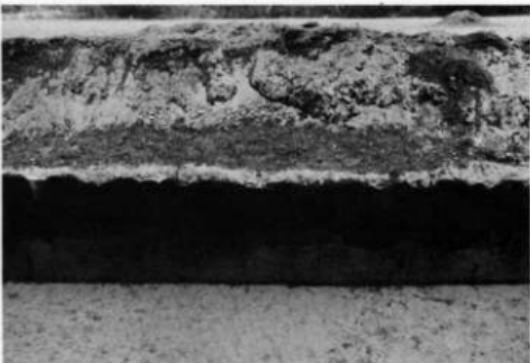
真性院芳泰寺の山門（初代胤頼の墓がある）



東六郎胤頼夫婦の墓



第1トレンチ（南から）



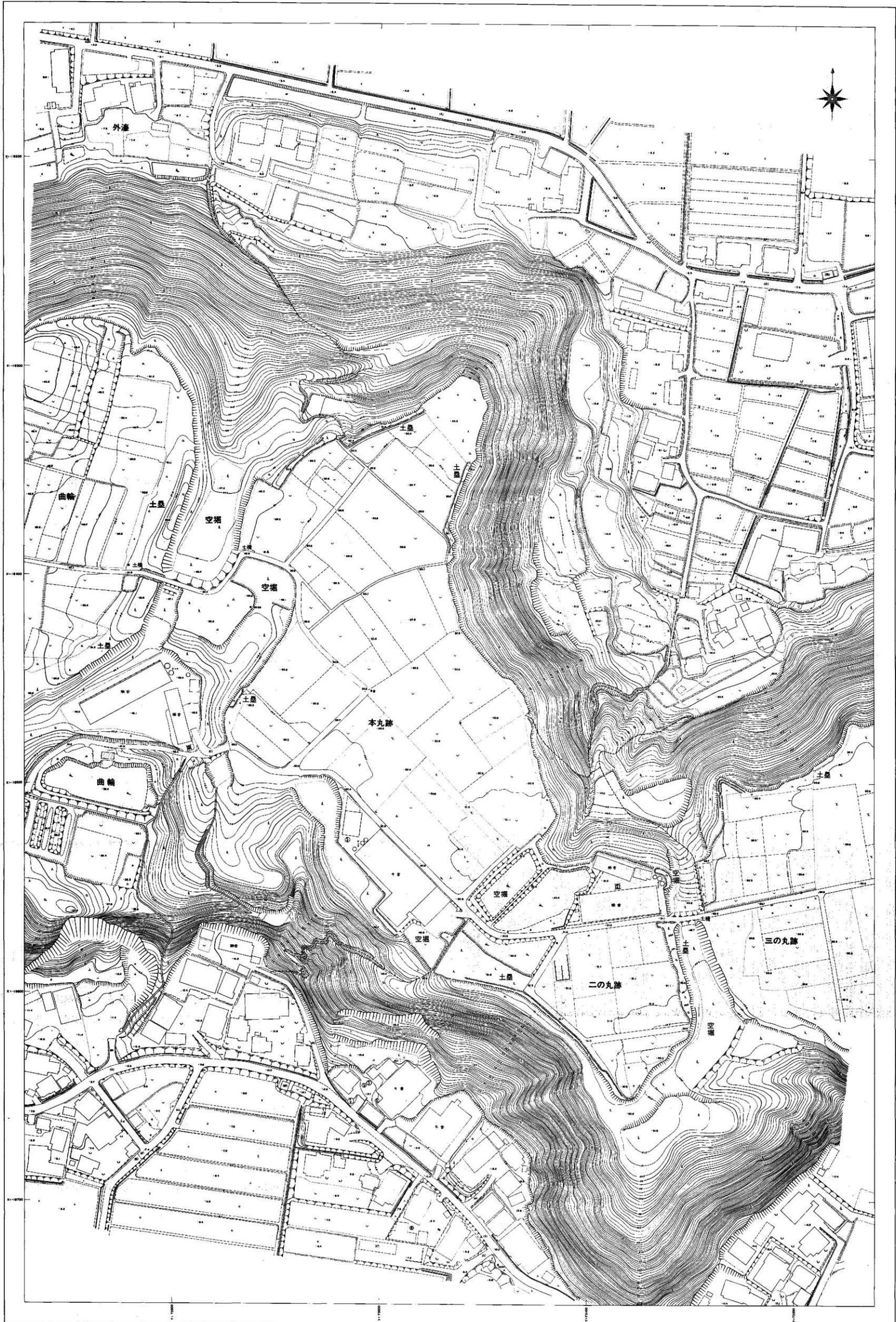
第1トレンチの土層



第2トレンチ（西から）



第2トレンチの土層



付図 森山城跡（本丸周辺）地形測量図

1:1000



本納城跡概念図の説明

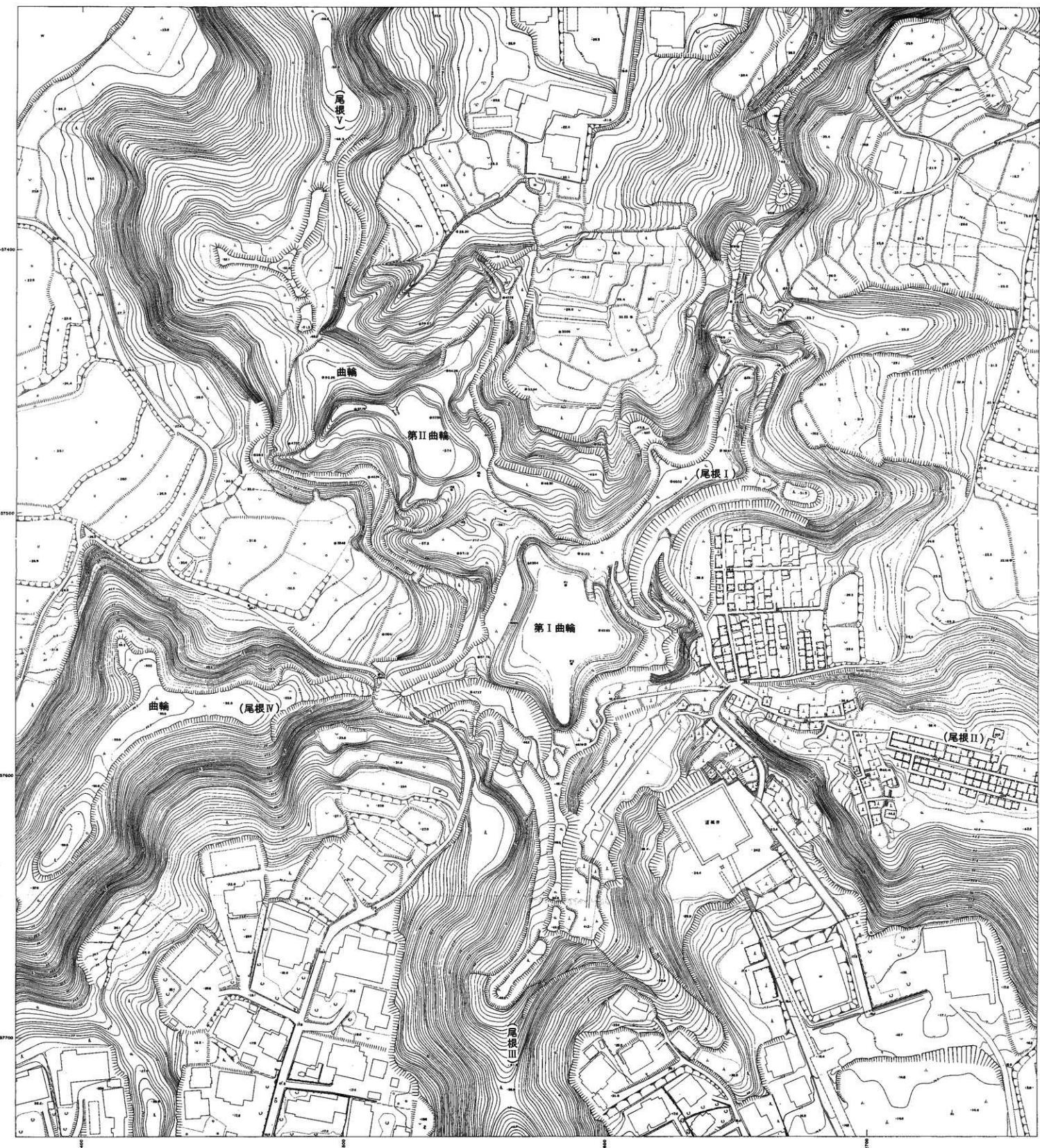
- (1) 那山原、尾根等、標高の高い部分は、比較的広い平田を構成するものと、支尾根上部を均した低い平野型の場合がある。
- (2) 地形輪、帯状地形輪、一側斜面に多く見られる。自然地形輪、人為的地形輪とも言える。交互に繋がるものが多いため、複雑な場合がある。
- (3) 崎切り、尾根を切断するが、位置、目的によって工事も含む。
- (4) 断崖、第一級断崖に見られるが、未確認のものも多いと思われる。
- (5) 斜面、一級斜面を一定の高さで、斜面間に削り落としているものをそう呼ぶ。主に急斜面の周囲に見られる。
- (6) 切断部、切り落とした所特に地盤をいわら低い方が垂直面近く削り落として、上段と下段の高差を詰めているものを呼んだ。
- (7) 井戸・湧水・丘陵の裾部には、多くの湧水がみられる。また、「高麗大頭お茶の井戸」などに見られる井戸も複数にあり、丘陵上には認められなかつた。

2. 巻尺・目測による作図である。
未完のため今の全貌を捉入とは
ない。

図はなかつたが、城跡跡には
ヤドケの跡が最も多く認められた。

なお、唯金岡の跡になつたのは、
茂原市都市計画平面図(縮尺
2,500分の1)を使用した。

1-3図 本納城跡概念図



1-4図 本納城跡地形測量図

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第2集

—本納城跡・森山城跡発掘調査報告—

発行者 財団法人 千葉県文化財センター

発行 昭和57年3月30日

印刷所 弘文社